映画脚本家、成沢昌茂さん（42 期）を偲んで

上原 昇（2 組）

著名な映画シナリオ作家、成沢昌茂さんが上田出身で上田中学（高校）同窓だと知っている人は、余程の映画通といえるだろう。映画業界に進む同窓生が少ないこともあり、今ひとつ知られていない大先輩について紹介してみたい。
その略歴を見ると、1925 年（大正 14 年）、上田市原町に生まれ、上田市長を務めた成沢伍一郎（1930-38 年、市長在職）の次男であるという。略歴は以下の通り続く。旧制上田中学（42 期）卒業後、溝口健二監督に内弟子として師事し、日大芸術学部を 1944 年に卒業、学徒出陣で従軍、捕虜生活を経て 45 年に復員する。
脚本家としては、51 年、「馬喰一代」（木村圭吾監督）でシナリオ賞受賞。
「鴈」（53 年、豊田四郎監督）の脚本がヴェネチア映画祭で高く評価される。
その後、「明治一代女」（55 年、伊藤大輔監督）、「赤線地帯」（56 年、溝口監督）、「風と女と旅鴉」（58 年、加藤泰監督）、「浪花の恋の物語」（59 年、内田吐夢監督、同年邦画ベスト 7 位、シナリオ賞受賞）、「宮本武蔵」（61 年、内田監督）、「はだかっ子」（61 年、田坂具隆監督）、「関の彌太っぺ」（63 年、山下耕作監督）と次々に巨匠と組んで名脚本を書き続ける。
映画好きの筆者もこうした作品を公開時より少し遅れて鑑賞して、「浪花の恋の物語」などは今でも記憶に残っている。
62 年には監督に転出し、「裸体」を完成させ、5 作を残しているが、監督としてはこれといった評価は得ていない。
1950 年、60 年代には、成沢の筆になる映画作品は 50 作を超え、地味ではあるが、当時の邦画界を支えた映画人であった。70 年以降は、NHK テレビ連続人形劇「真田十勇士」などの脚本を手掛けたが、75 年からは舞台の脚本と演出に専念。
今年 2 月、大正・昭和・平成・令和と駆け抜けた成沢は、都内の自宅で老衰のため 96 歳の生涯を閉じた。関東同窓会との接点はあまりなかったようである。
7 月 10 日から 30 日まで、名画座「シネマヴェーラ渋谷」では「成沢昌茂 映画渡世」と題して追悼特集を開催しているが、コロナ禍のため行くのを躊躇してしまうのは残念だ。
http://www.cinemavera.com/programs.php

在りし日の成沢昌茂さん
「キネマ旬報」より

（2021 年 7 月 21 日記）

以上